

石川達三

愛の終りの時

石川達三
愛の終りの時

新潮社版

愛の終りの時

石川達三作品集第十七卷

昭和四十七年三月二十五日発行
昭和四十九年七月十日五刷

定価 八五〇円

著者 石川達三

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京〇三(増)一一一一
振替東京八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社

装画 下田義寛

目次

愛の終りの時

5

稚くて愛を知らず

253

解題

久保田正文

407

愛の終りの時

愛の終りの時

愛の歴史

東京駅まで見送りに来てくれたのは、新郎新婦の学友や、つとめ先の友人たち五、六人だけで、両家の親たちと合わせて十人ばかりだった。長いフォームのあちこちに、同じような見送りの人のかたまりが幾つもあつた。

発車合図のベルが鳴ると、けたたましく万歳をさげぶ人もあり、祝福の言葉をおくるのにわざと英語を使う青年もあり、静かに涙をぬぐう母親もいた。

そういう母の姿を、茂子は却^{かえ}つてうらやましいような気持ちで見ている。彼女自身はもつと何か、しらしらしいものを感じていた。それは娘を嫁にやるといふ事の味気なさであつたかも知れない。この二カ月ばかりのあわただしさの、これが最後の幕切れみたいだった。彼女は何となく、娘に裏切られているような気がしていた。

新郎新婦は汽車の窓をあけて、若い顔をならべていた。見送りの友達とのあいだで、はずんだ、いたずらっぽい会話を投げあつたり、お礼を言つたりしていた。茂子は

その人たちのうしろから伸びあがつて、いつもよりも美根子は美しくないと思つていた。出来たての新しい服はまだ彼女のからだに馴染^{なじ}んでいなかったし、小さな花をつらねた髪飾りは派手すぎて眼ざわりだった。それに真珠のネックレスとブローチとイヤリングと新しい金の指環とでは、飾りが多すぎて却つて物ほしげだった。母がその事を注意したのに、美根子は言うことをきかなかったのだ。だって他の時と違うんだから、賑やかにしてもいいのよ。少なかつたら淋^{さび}しいわ。……いつだってそういう風に自分の考えを押し通す娘だった。母の眼から見ると飾りが多すぎて安っぽい。そのうえ、顔色が疲れていた。

今夜は熱海どまり。あすは京都。あさつては奈良。その次の日は大阪の予定だった。旅行から帰ってくる頃には、美根子はもつと疲れているに違いない。新婚旅行は女を疲れさせるものなのだ。母はその疲れの意味を、一から十まで知っていた。これから先の数日のあいだに、美根子の上に起り得るすべての事を、なまなましい程のあざやかさで茂子は全部知っていた。彼女自身、三十年まえに、その通りのことを経験してきたのだった。時代が變つても、思想があたりしくなつても、すこしも變ることなく、それは同じように若い人たちの間で繰り返さ

れる経験であつた。

茂子はもう一度あらためて、窓^ぐの中にならんでゐる二つの顔をくらべて見た。新しい愛情生活が、彼等ふたりのあいだに建設されつつある。希望と、よろこびと、成長と。……それらすべてを引くるめた人生の幸福にむかつて、彼等ふたりは出発して行く。この出発は貴重に思わなくてはならない。上手に生活してゆきさえすれば、二人の愛情はいまから三十年も続けられるだろう。

汽車が動きだした。人々の群れは崩れた。母は動いて行く窓に走り寄つて、美根子、美根子、と叫んだ。しかし美根子はもう、母の声を聞いてはいなかった。ハンカチを振る二人の手が、流れるように遠ざかつて行った。

汽車が見えなくなると、茂子は良人とふたりで見送りの人たちに礼を言い、殊に先方の両親には、美根子のことを宜しく宜しくと、何度も頭を下げて頼んだ。これは母としての最後の勤めだった。

そのあいさつが終ると、結婚式もようやく一段落だった。彼女は絹のショールを肩にかけながら、良人と二人きりになって、階段を降りた。自動車代は高いから、電車で渋谷までゆき、さらに郊外電車に乗りかえて帰るつもりだった。

地下道から、もう一度電車のフォームにあがる階段にさしかかったとき、良人は頭をちかづけて来て、

「あつけないもんだな」と言った。

彼の顔は肥^とつてはいるが、もうすっかり老人だった。

老人の頬には淡い笑いが浮んでいた。娘を奪い去られた父の、あきらめの微笑だった。

「だって、仕方がないでしょう」と妻は言った。「順番ですもの。みんなそうなるんですわ」

「それや解^とつてゐるがね」

（あなただつて……）という言葉が茂子の胸にうかんだ。（私の親たちから私を奪い取つて女房にしたんじゃないの）……あの時の彼女の親のなげきが、いまは茂子の嘆きであり、定四郎の嘆きであつた。わかり切つたことであり、平凡なことであつた。平凡なことではあるが、はいかのうちに、一度は経験しなくてはすまない悲しみだった。

電車の座席にならんで腰をおろしたとき、定四郎は腕時計をみて、

「もう品川を過ぎてるな」と言った。

それは父親の未練だった。いまからでは、もう何もかも手遅れだった。美根子は今夜、藤田泰孝の妻になる。美根子はもうその気になっているのだから、引きとめる

訳には行かない。

あの汽車はいま品川をすぎて、横浜にむかつて走っている。茂子はその二人の姿を考えてみようとした。すると、美根子の姿ではなくて、あの時の自分の姿が思い出されてくるのだった。着ていた着物の色も柄も、帯もシヨールも、全部おぼえていた。紫地に小紋を散らした着物だった。

あの日から、三十年経っている。もっと正確に言えば三十一年と一カ月たっている。その永い年月を、茂子は定四郎といっしょに暮して来たのだった。よくもよくも、飽きもせずに二人の暮しを続けて来たものだと思う。馬鹿のひとつ覚えみたいに、彼女はひとりの男といっしょに生きて来たのだった。そのあいだに菊雄を産み、譲治を産み、美根子を産んで……。

その美根子が、きょう結婚したのだった。母の歩いてきた人生の経路を、今度は彼女が歩いて行こうとしている。母親がたどってきた愛の経路を、美根子は今日から新しく歩きはじめるのだった。母の愛の経歴は、三十一年を経て完成したようであった。人間の愛の歴史は三十年を一期間として、次の時代のものに受け継がれてゆく。良人と妻とがつくる鎖の輪が三十年にひとつずつふえて、継ぎ足されて、永い永い人間の愛の歴史を積みあげて行

くのだ。

まだ七時まえだった。駅ごとに人の乗り降りがはげしかった。定四郎は披露宴の酒の酔いが残っていて、「のどが乾いたな」とひとりごとのように言った。それに誘われたように茂子は、

「おいしい料理でしたわ」と言った。「菊雄のときはひどかったけど、今日のは、あの位なら上等よ。美根子の式服、よかったでしょう」

「ああ良かった」

「帯との調和がとてもきれいだったわ」

「うむ、よかったよ」

「ずいぶん苦労したのよ。あんまり古風な着物では似合わないでしょう。へいぜいは洋服ですからね。あの子の人柄に合った色や柄を見立てるまでが、本当に苦労でしたわ」

母のそういう苦労を、美根子は根こそぎに婚家へ持つて行ってしまうのだった。何もかも……。父と母とが生活を切りつめながら、営々として貯えた老後のための資産のなかから、三十数万円もけずり取って、それで結婚の支度をととのえたのだ。美根子はそれを当然の権利のように思っていた。しかし美根子ばかりではない、茂子が定四郎のところへ嫁してくる時にも、彼女はやはり当

然の権利のように思っていた。

それは嫁に行く娘たちに共通な一種のエゴイズムだった。彼女たちは有りつたけのものを、あたらしい良人のところへ持って行こうとする。持って行った品物の一つ一つが、二人の愛のとりでを築く石垣になるような気がするのだった。ひとつでも品物の多い方が、それだけ二人の生活がゆたかになるように思われる。女が、生涯のうちで、一番貪慾になる時期だった。自分のためではなく、二人のための貪慾さである。その貪慾さが、二人の愛の生活を築いて行こうとする強烈なエネルギーでもあった。

「帰って来るまで、心配だわ」と茂子は小さな声で言った。「うまくやれるかしら……」

「大丈夫だよ」と良人は少し間をおいてから答えた。

「何か特別なことでもない限り、無事に行くさ。もともと無事に行くように出来ているんだ。男と女だからね」

「それは、そうでしょうけど……」

そういう会話は夫婦だけのものだった。言葉の裏に別な意味がふくまれて居り、ふたりとも暗号のような言葉ではなしをしているのだった。新婚旅行に出て行った二人が肉体的にうまく結びついてくれるかどうか、その事を母は心配して居り、それを父は樂觀しているのだった。

彼等自身は三十年もまえにその結合に成功し、それが今日まで続いているのだった。そういう経験と自信との上に立って、彼等は美根子の成功を願っていた。願っているけれども、自分たちの経験をあからさまに語り聞かせて、教えてやる訳には行かない。若い人たちは自分で経験し、さとり、自分たちの方法を発見して行かなくてはならない。それが新しい愛情を建設するための一つの危機であり、その後につづく三十年の愛の歴史の、基礎になるものであった。そう考えてみると、美根子の新婚旅行の結果が、母としては一層心配になってくるのだった。

上の二人は男の子で、美根子はひとり娘の末っ子だった。父と母との溺愛を受けるような条件が彼女にはそろっていた。女の子というものは、産れたときから女の雰囲気をもっているものだった。菊雄や譲治が産れたときとはまるで違った、一種ものやさしい雰囲気があった。それは親たちの気構えの違いだけではなくて、もつとしたかな、はつきりしたものだった。

男の子に対する両親の期待と、女の子に対する期待とは、まるで質のちがったものだった。女の子には優しさや美しさを、無条件に求めていた。うまれて僅か数日後に、まだろくに眼も見えない美根子の顔に、産婆が

うすく化粧をしてくれたものだった。そうしておけばお嫁入りの時に白粉おしろいがよく付くのだという言いつたえがあるのだ。女の子は嫁に行くためにうまれ、嫁にやるために育てられるものようだった。茂子も定四郎も、その事について特に疑問もたなかったし、意見もなかった。彼等は平凡な父であり、平凡な母であった。

美根子がうまれたのは、茂子が定四郎と結婚してから七年目、まだ彼女は三十になつていなかった。三人の子持ちになつた彼女は、忙しいには忙しかつたけれども、彼等のこれまでの三十一年にわたる永い夫婦生活のなかで、一番に内容の充実した時期であった。定四郎は四十まえの働きざかりだったし、健康でもあった。日本と中国との戦争はまだ始まつていなかったから、世の中も平穏であった。定四郎は惜しみなく妻を愛し、美根子に乳をふくませている茂子を、二人いっしょに、彼女のうれしから大きく抱きしめてくれたものだった。すると茂子は自分のからだをとりかこむ豊富な愛の量に溺れそうな気持ちになつて、あえぎながら良人にうつつえたものだった。(あなた、あなた、放してちょうだい、苦しいわ。……)

あの頃が一番よかった、と茂子は眼を閉じて考えていた。電車は品川を過ぎていた。あの頃のことを思い出す

と、いまでも新しくからだの感覚が昂進してくるようだった。夫婦の愛情にもおのずから成長期と成熟期と、衰退期とがあるらしかった。年月を経るにしたがつて成長の度を加えるものではなく、成熟期からあとは次第に衰退してゆくものようであった。

定四郎はまた腕時計を見た。彼がなぜ時計を見たか、茂子にはわかつていた。良人の心の動きは、説明されなくても全部わかるのだ。

「もう横浜ですか」と彼女は言つた。問いかけたのではなくて、つぶやいただけだった。

定四郎は答えなかった。答えなくても解つてゐるのだ。彼は六十を過ぎて口数がすくなくなつていた。それは体力の衰えから来たものかも知れなかった。結婚式のどさくさで彼は疲れていた。眼を閉じると美根子の顔がうかんで来る。危険な旅に娘を送り出したあとの、不安な気持だった。美根子が結婚して、良人と称する男ができて、彼の愛撫を受けて、美根子が妻になる。……その事が、彼は正直に言つて、我慢ならない気持だった。彼女が結婚すること、彼女が凌辱りやうじゆくを受けることが、父の気持からすれば、同じみたいだった。美根子がそれを幸福に思つてゐるということが、父にしてみれば誠に心外だった。

本當を言えば、こういう結果になるであろうことは、二十五年まえから解っていた。美根子が女として生れてきたその時から、運命がきまつていたのだ。そんな事は定四郎だって百も承知だった。承知の上で、しかも我慢がならない氣持だった。しかし美根子の結婚に反対する訳にはゆかない。結局は父は娘を祝つてやるより仕方がないのだった。

美根子にしてみれば、置き去りにされる父の嘆きなどは、考える必要のないことだった。彼女にとって父という存在は、もう用がないのだ。父も母も、まだ利用価値はあるけれども、それだけのことだった。彼女の心、彼女の愛情は、ことごとくあたらしい良人の泰孝にだけ与えられている。父や母に対する彼女の愛情は、どこにも無い。多少は有るかも知れないが、蟬の抜け殻のように、かたちばかりで中身のない愛情だった。父はそのことのはかなさを深く感じていた。

娘に愛されたいとは思わない。娘は勝手にあたらしい生活を築いて行けばいいのだ。ただ、これまでの二十五年、心をつくして愛し育ててきた父の心の深さが、美根子にはちっとも響いていないような氣がするのだった。味気ない、さびしい氣持だった。

もともと父などというものは、子供にとってはあまり

大切なものではないのかも知れない。母がみごもった後は、単なる保護者にすぎないし、うまれてからのちは経済的な扶養義務者にすぎなかった。犬や猫には父は要らないのだ。母でさえも生後二カ月たったら、もう用はないのだ。犬や猫はその時がきたら、さっさと親から別れてゆく。人間はその子が結婚するまで親たちといっしょに暮している。いっしょの生活が永過ぎるのかも知れない。

「風呂はわいてるだろうか」と定四郎が言った。

「さあ、どうでしょう。何も言わないで来たから、無いかも知れませんが。きのうわかしたでしょう。……今からでも大丈夫よ。一時間でわきます」

「風呂へでもはいつて、一杯やりたいな」

「まだ一杯やるんですか」

「お祝いだよ」と父は言った。祝う氣持は充分にあるのだが、それと同じくらいに淋しかった。

「だんだん淋しくなりますね」

「ああ。みんな行ってしまうよ。そのうち譲治だって嫁をもらって、どこかへ行くだろう。どうせうちになんか居やしない」

そうなれば、残るのは二人きりだった。もともと結婚したときは二人きりであったのだ。それが三人になり四

人になり、賑やかな家庭になって、やがてまた分散してゆき、元の二人きりになってしまふ。三十年たつて、年老いた二人だけが、子供たちから置き去りにされて行くのだった。それもこれも、解り切ったことだった。殊に戦後、家族制度が廃止され、人々の気持のなかから家族という意識がうすれて来て以来、成長した子供たちは、あとをも見ずに親から離れてゆく。たんぽぽの実が風で吹き散らされて行くように、それが一番自然な彼等の生き方であるのかも知れなかった。

中野定四郎と岡田茂子とは、もともと遠い縁つづきのあいだ柄であつた。定四郎は初婚ではなかった。大学を出てすぐに結婚したが、その妻は女の子を産んで間もなく病死していた。その事があるために茂子の縁談は一年ちかくも保留されていた。結局、子供は定四郎の母が育てるといふ条件がきまつたのと、お互いに氏素姓がわかつて居るといふことと、定四郎が将来有望な青年であるといふ事などで、両家の話しあいがついたのだった。しかし話しあいがつく前に、二人のあいだには新しい愛情が育っていた。

茂子の両親は最後まで反対であつた。なにも再婚の人のところへ行くことは無いというのだった。それを茂子

が押し切つたかたちだった。

「わたし、行くわ」と彼女は言つた。「死んだ奥さんの事なんか、考えなくてもいいと思うの。それやわたし、損かも知れないわ。損だつていいの。行きたいんだから、行くわ」

茂子はみずから自分の道を選んだのだった。そのようにして二人の愛情生活は出発した。定四郎は大蔵省の官吏で、仕事のできる、まじめな男だった。妻に対する彼の愛情もまじめだったし、子供たちを育てて行く彼の心がまとも真面目だった。茂子はたしかに良い男を良人に選んだと思つていたし、良人の在り方にも満足していた。それから後は、紆余曲折した永い永い生活の日々であつた。紆余曲折は、夫婦の愛情の波の起伏でもあつたが、また国家社会の変動によるものでもあつた。

美根子がうまれて二年あまりののち、定四郎は召集をうけて出征した。その二年半ほどの間が茂子にとっては最大の危機であつた。茂子だけではなく、三人の子供たちにとつても大きな危機であつた。同時にそれは日本中のすべての家庭にとつての危機でもあつた。家族のなかの父という存在が、この上もなく貴重に思われた時期だった。父を奪い去られた日本中の無数の母子家庭が、あえぎあえぎ、辛うじて生きて居た時代であつた。

やがて定四郎は肋膜炎にかかって内地に帰還し、さら

に肺をわずらって二年ばかりの療養生活をおくった。その合計五年にちかひ協道の生活が、役所のなかに於ける彼の地位を決定的に悪くしてしまつた。彼が役所の勤めにもどつた時には、同僚たちとの間に大きな差がついて居り、その差は最後まで埋めることの出来ないものであつた。それは定四郎だけではなく、応召した役人たちの大部分が同じような不遇を嘆いていた。命をかけて国に奉仕した者が、却つて終生不利な立場に押しやられてしまつたような具合だつた。

結局定四郎は、永いあいだ課長をつとめただけで役所を停年退職し、しばらくは親子五人が経済的な危機に立つ思いをしたのであつたが、半年ばかり後に、幸いにも近くの私立学校に職を得て経理事務を担当し、二人だけならば貯金を減らさなくても生きて行ける程度の収入を得て、ともかくも平穩な晩年を暮しているのだつた。

定四郎のすまいは郊外電車の駅から、歩いて十分ばかりの距離だつた。坂の多い、暗くて細い道だつた。定四郎は登り坂にかかると、眼に見えて歩速がおくれた。すると茂子は六十を過ぎた良人の年齢を、いたましくも思ひ、齒痒くも思うのだつた。この坂の多い細い道は、つい数日前に、美根子の婚礼の荷物をはこび出すトラック

が、難渋した場所であつた。

石垣を積んで段々になつた東傾斜の土地に、小住宅が七十戸ばかりもかたまつていて、その中の一つが定四郎の家だつた。建ててから十二年になる。戦後のインフレーションの時であつたから、普通ならばとてもそんな事は出来ない筈であつたが、土地だけを戦争中に買つてあつたので、辛うじて出来た家だつた。土地百七坪八合。家は二階建てで延べ三十坪四分ノ一。木造モルタル塗りの家に、ともかくも赤い瓦がのせてあつた。これは中野定四郎が生涯に一つだけ建てた彼の家であつた。彼がこの地上に残したものは、二人の娘、二人の息子と、そしてこのささやかな一軒の家だけであつた。

家の前まで帰りつくくと、美根子が居なくなつた家庭のさびしさが、もう、そのあたりの夜のなかにいっぱいに重く淀んででもいるように、茂子は感じるのだつた。玄関の入口にほの暗い電灯があるばかりで、家のなかは暗かつた。彼女は良人より先に門の格子をひらき、玄関の引き戸をはげしく叩いた。

家の中に灯がついて、照子が硝子格子をあけに出てきた。彼女は茂子の遠縁の娘で、家事見習いという名目で、実は女中代りに使われていた。両親のない、孤独な女だつた。